

Title	マルクシズムのフランス流入に関する一考察：ジュール・ゲードの思想的展開
Sub Title	Une étude sur l'introduction du Marxisme en France : Jules Guesde
Author	村田, 光義
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.3 (1962. 3) ,p.285(77)- 299(91)
JaLC DOI	10.14991/001.19620301-0077
Abstract	
Notes	社会思想史研究特集 資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620301-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

底流でしかありえず、階級闘争の激化と民主主義革命を前にして、絶対主義勢力に妥協する面を濃厚にもっていたといえるのではなからうか。初期マルクスにおけるイデオロギー闘争が、真正社会主義者にたいしてもっともはげしくおこなわれた歴史的・理論的根拠は、このような理由によつていたといえるであらう。

(1) Marx und Engels: Werke, Bd. 4, S. 251. 邦訳二六二頁。

(2) Förder: ebenda, SS. 142-143.

—一九六二・一・一〇・深更—

マルクシズムのフランス流入に関する一考察

—ジュール・ゲードの思想的展開—

村田光義

フランスのみならず世界の社会主義運動に大きな意義をもったパリコミューンが、血の海の中に葬りさられてより数年をいわずして、ティエールによつて「もう話されることもなく、すっかりかたづいてしまった」と思われた社会主義運動が、再びフランスの地によみがえった。マルクシズムのフランスへの流入を、この再興した社会主義運動との関連の中にとらえようとするのが本稿の目的である。

マルクシズムの影響がフランス社会主義運動の中に現われたのは、パリコミューン以後であるという点で諸説は大体一致している。^(注1) A. Zeras は「コミューンの人々の大部分はマルクスの名をえしらない。市庁政府の中でマルクスとマルクシズムを唱えていたものはただ一人、フランケル (Leo Frankel) だけである」^(注2) といひ、S. Bernstein もマルクシズムはコミューン以前のフランスでは、殆んど知られていなかったとのべている。^(注3) またエンゲルスとラファエルダ夫妻の書簡集を編纂した E. Bottigelli も「コミューン当時マルクスの思想は、フランスには全然普及していなかった」と記している。^(注4)

マルクシズムのフランス流入に関する一考察

では何時頃、誰によつて、どのようにマルクシズムはフランスに導入されたのか。この問題をマルクス派の第一人者と目される、J. ゲードの思想的展開を中心に——コミューン以前のフランスとマルクシズムとの関連を再検討する意味をも含めて——見てゆきたい。

(注1) エンゲルスはマルクスの「フランスの内乱」ドイツ版第三版への序文で「コミューン議員の少数のもののみがドイツ科学的社会主義を唱へた」として E. Vaillant をあげている (Der Bürgerkrieg in Frankreich mit Einleitung und Anmerkungen von A. Conrady (1920) p. 130. 岩波文庫版「フランスの内乱」一六六頁) が、Ch. Longuet は Vaillant はまだブルードン主義者であったとして「このことを否定している」(同書一八〇頁)

(注2) A. Zeras: De L'Introduction du Marxisme en France (1947) p. 49. 以下 Zeras: De L'Introduction 以下。

(注3) S. Bernstein: The Beginnings of Marxian Socialism in France (1933) p. 186. 以下 Bernstein: The Beginnings 以下。

1

一九世紀の半ばから二〇世紀の初頭にかけてのフランスは、経済の殆んど全分野にわたって企業が活気をおび、資本主義が勝利の道を進みつつあったという事実によって特徴づけられる。驚くべき機械の進歩は生産を増大させ、職人階級と小規模工業の消滅をまたずに大工業が急速に発展する。金融業に始まる資本の集中は銀行をして産業の推進器たらしめた。一八六〇年の通商条約は特にフランス経済を刺激し、さらにアルジェリア、セネガル、インドシナへの進出は、海外市場を拡大して資本主義発展に役立った。ナポレオン三世の時代は政治的にはともかく、経済的にはまさに一時期を画すものであった。しかしこうした経済発展にもかかわらず、他方フランスは多くの年金所得者を有し、人々は安定した収入、確実な地代を偏愛し、企業は国家の保護を求めて危険を好まず、大規模な投機を懸念する経済的傾向をも有していた。海外投資においても産業投資より、国債を主とする高利貸帝国主義であった。このようにフランスが他の国々、特にイギリスに比して産業的に遙かにおくれ、一九世紀後半においてさえ何よりも先ず農民の小土地所有の続いていた農業国にとどまっていたことを、フランス労働運動の性格をみるに際して十分に記憶しておかなければならない。

ジュール・ゲード (Jules Guesde 1845-1922) はこのような時代を

フェリー (Jules Ferry) を始めとする共和主義者、民主主義者も、労働者を最前列において皇帝専制政治にたいし激しく闘っていた。パリでは仕立屋や青銅鑄造工が、エルブッフでは羊毛紡績工が、リヨンでは八千人の絹織糸工がストライキをおこし、各地の経済闘争は著しく増加しつつあった。一八六九年の夏、マルクスもこのようやうく動揺を始めたフランスの情勢をみるために、約一週間をパリで過ごし、運動の成長は全く一目瞭然だとエンゲルスにかいている。情勢におされた皇帝は自由主義的改革を決意し、専制に議会制をとり入れた一八七〇年の憲法を国民投票に付した。憲法は承認されたけれども帝政の弱体化は目に見え、帝政に甘んじているのは社会の不安定を極度に恐れる富裕なブルジョアと、保守的な農民層のみであった。

パリから帰った直後主筆となった「La Liberté de l'Herault」で思うようにかけないゲードは、再びパリに出る。ここで協力者を求めた彼はモンペリエで「Les Droits de l'Homme」(以下「人權」とする)を出す。一八七〇年六月二日の第一号は、第一にいかなる君主制ともあいられない国民主権——役人の選挙と罷免をも含む国民主権を、第二に結社の自由、独占の廃止、税制の改正、公職削減などによる生活水準の漸進的改良を、第三に教会と国家の即時分離を主張する。彼はいう。「もし人がわれわれの原理を一口にいえていりならば、それは正義である。……この言葉は誤用されるゆえに説明する必要がある。われわれはブルードンの適切な定義をとりあげよう。正義、それは諸権利と諸自由との均衡である。」この綱領の

マルクシズムのフランス流入に関する一考察

背景として、カトリック教徒であり保守主義者であった両親の下に成育した。しかし一四歳のときユーゴの詩集「懲罰」(Les Châtiments) や「瞑想録」(Contemplations) の影響によって共和主義者となり、一六歳のときカントの「純粹理性批判」をよんで道徳的形而上学的観念を身につけ、さらに哲学殊に一八世紀唯物主義哲学を研究して無神論者となった。一九歳のとき生活のためセーヌ県庁につとめた彼は、余暇に帝室図書館で古い民主主義新聞を調べ、政治討論会にかよううちに政治に生きた決心をし、役人をやめて名前をジュール・パジールからジュール・ゲードにかえた。二二歳になった彼はパリの二つの新聞「La Situation」およびブルジョア左派的な「Le Courrier français」にいくつもの論文をかく。ドイツがフランスとの戦争で再びアルザスを得ようと狙っていることをのべた La Question allemande や、南北戦争後黒人に投票権を拒む南部栽培者の貴族政治を支持したアメリカ大統領ジョンソンを攻撃する Les Idées de M. Johnson がこの中に含まれている。前者は彼の見通しの正しさを、後者は民主的共和主義者としての彼の激しい正義への情熱を示すものであった。一八六八年比例代表制の運動を指導するトゥールーズの「Le Progrès Libéral」の編集にたずさわったが、たんなるオルレアニズムの態度にあきたらずまよることなく去る。翌年五月から六月にかけての短いパリ滞在中、総選挙に際しブランキストのロンユフォール (Dr. Rouher) に敬意を示す文をかいたため、彼にとつては最初の刑に処せられた。彼がこのような民主的共和主義のジャーナリストとして活動していた頃、ガンベッタ (Léon Gambetta) や

性格はまさにプチブルの憧れと幻影とを反映したものであった。したがって要求される民主的國家は専制國家にのみ対立するものとしてとらえられ、國家の役割も諸権利の自由な行使の保証にあると考えられたのである。

一八七〇年プロシヤと戦端が開かれるや、彼は激しく反戦の世論を喚起し、「敵は國境にあるのでもなくベルリンにあるのでもない。あらゆる形態の専制にある」として、戦争、貧困、無知の源泉を専制主義にみた。彼は戦争の眞の原因をまだ見破るには至らない。「人權」のこうした論説は彼にとって六ヶ月の刑と三千フランの罰金となった。そして敗戦に続く待望の共和制の下に、役人の地位を断わり「人權」の主筆となった彼は、共和制と祖國防衛の警鐘をならしつづける。パリ籠城にたいしパリは共和制にかかわる問題だと諸県の大衆の一斉蜂起を促がし、國防政府の借り入れに署名しないのは裏切りだと資金調達を訴える。武器をとれ、と國防政府と共和制の下に徹底抗戦を叫ぶ彼は、また La Ligue du Sud-Ouest の指導者として Alliance Republique Parisienne のモンペリエ支部創立者として、大衆組織のために活躍した。しかし民衆の革命的機運の高まるにつれ後退した國防政府は、七一年二月に休戦条約承認のための総選挙を行う。ゲードはガンベッタへの公開状の中で、プロシヤに強制され、反共和的、反フランス的反動どもによって要求された選挙を、共和国フランス、南部の民主主義者は望まないと非難する。この選挙は必ずあらゆる種類の反動に有利になるにちがいないという彼の言葉は正しかった。國民議會は王党派と上層ブルジョアに

よってしめられた。この反動的国民議会に対し共和制を護るためパリは立上る。一八七一年三月二八日、パリコミューンの幕はきつておとされた。ここでコミューンについて詳しくのべることはできない。ただそれは短命ではあったがプロレタリア自身の手によって組織された最初の政府であり、世界のプロレタリアに大きな刺激をあたえたと同時にブルジョア階級の強大さが如実に示され、従来の熱狂的暴力主義の再評価の下に新しい社会主義運動を出発せしめる契機となつたことをのべれば十分である。^(注13)「さあ、東部や南部の諸都市よ沈黙をやぶれ」沈黙は必ずや後悔となろう。明日参加せねば明後日では遅いのだ^(注14)と彼は叫ぶ。プロシヤ人があえてしなかつたパリ攻撃を、ヴェルサイユのフランス人がおこなうことに彼は憤激する。「われわれを王制復古からへだてるもの、それはパリの城壁の厚さだけなのだ。叛逆的会議場で組織されたレジチミストのクーデタを現在ふせぐただ一つのもの、それはパリ、コミューンのパリ、連盟兵のバリなのだ。……われわれはヴェルサイユに反対しパリに味方する。」^(注15)ゲードの熱烈な擁護もむなく五月二八日、コミューンはついでさり、彼は五年の刑と四千フランの罰金を課せられた。だが、早くも判決まえに彼はスイスに亡命していた。

フランスは、ヨーロッパ最初の共和国になるか、最後の君主国になるかの二者択一を迫られていると説き、共和制のみが祖国を救い、たてなおし、失った栄光をとり戻しうるといふゲードは、^(注16)第二帝政からコミューンの最後まで、急進的共和主義ではあったが、決して社会主義者ではなかつたのである。

(二)

ジュネーヴに亡命したゲードは、三つの方面で活躍する。先ずジャーナリストとしては、共和主義者を結集する目的で「Le Reveil international」を創刊し、次いで著述家としては、パリコミューンに対する反対者たちの誹謗にこたえて、*Livre rouge de la justice rurale* をかへ。Documents pour servir à l'histoire d'une République sans republicaines といふ副題をもつたこの本は、ヴェルサイユ側のブルジョア新聞から、コミューン当時のヴェルサイユ側の抑圧と残忍さを示す記事と論評とを、巧みに抜萃したものであった。しかしこれはコミューンの運動のみをのべてその起源と性格を分析していない。ゲードの第三の局面はジュラ連盟の闘士としてである。当時のスイスは、インターナショナル内部の二つの派閥——マルクスおよび総務委員会派とバクーニン派——の互いに争う地であった。ブルードン、バクーニンの影響の大きかつたフランスの亡命者たちが、総務委員会の集権的統制を要求するマルクス派をきらつて、各支部の自治を主張するバクーニン派に属したことは理解できる。亡命者グループで早くも頭角をあらわしたゲードは、ジュウコフスキイ (Joukovsky) が諸国から専制主義をのがれてジュネーヴにきていたバクーニン派の人々を集めてつくつた Section de propagande et l'action révolutionnaire socialiste の代表として、ジュラ連盟のソンヴィリエ会議 (1871.11.12) に出席した。この会議で宣言書がギョーム (J. Guillaume) により起草されたが、

マルクスマのフランス流入に関する一考察

(注1) H. See: Histoire Economique de la France (1951) p. 246.
(注2) C. Willard; Jules Guesde: Textes Choisis (1959) p. 9. (以下 Willard; Choisis と略す) 以下 Grand Dictionnaire Socialiste de Compere-Morel は「純粋理性批判」で無信論者になつたとつう。
(注3) La Situation 1867. 10. 21, Compere-Morel; Jules Guesde: le socialisme fait homme (1937) p. 8. (以下 Morel; Guesde と略す) か引用。

(注4) Ibid., 1867. 12. 23-25. Morel; Guesde, p. 9. から引用。
(注5) Zévas; De l'Introduction, p. 29. 一八六九年七月七日から二日まで、マルクスは Williams といふ変名でラフバルグ夫妻の家に滞在する。
(注6) 井上幸治編「フランス史」(昭・30)二六六頁。
(注7) Morel; Guesde, pp. 16-17.
(注8) Les Droits de l'homme 1870. 7. 2, Morel; Guesde, p. 24. から引用。

(注9) Ibid., 1870. 7. 18. Morel; Guesde, pp. 30-31 から引用。
(注10) Ibid., 1870. 9. 21. Morel; Guesde, p. 41. から引用。
(注11) Ibid., 1870. 10. 11. Morel; Guesde, p. 44. から引用。
(注12) Morel; Guesde, p. 57.
(注13) 吉田啓一「近代フランス社会運動史」(昭・23)一頁。
(注14) Les Droits de l'homme, 1871. 4. 8. Willard; Choisis, p. 52.
(注15) Ibid., 1871. 5. 13. Willard; Choisis, p. 53.
(注16) Ibid., 1871. 5. 13. Willard; Choisis, p. 54.

ゲードもこれに参与している。フランス、イタリアなどの全部会に配布されたこの宣言書は、インターの正式大会の即時開催を要求し、総務委員会の専制を非難したものであった。

ゲードはこの頃肺炎となり、その療養とやらに「Le Reveil international」の廃刊による財源喪失のため七二年四月ローマに向ふ。彼はそこでフランス語の個人教授をしたり、「L'Italia Nuova」、「La Pibe」、「L'Égalité de Marseille」などのイタリア・ベルギー・フランスの諸新聞に寄稿しながら、高まりつつあつたイタリア労働運動を目標する。当時のイタリアは、リソルジメントによる自由独立統一を不完全ながら実現した後の発展期にあつた。しかし人民の暴動やストライキはつきつぎに弾圧され、一八六九年につくられたインターのイタリア支部も七三年に解散させられた。イタリアにおいても後進資本主義国の例にもれず、内部に半封建的要素が残存していたため、労働運動にはバクーニンの無政府主義の傾向が強かつた。彼は「Le Radical」の読者に *Letres de Rome* でイタリアの政治と労働運動を刻々しらせている。いまやシャコパンの要素をすてた彼はバクーニストの思想を明らかにする。労働者階級は欺瞞的普通選挙をしりぞけ、自己の政党をもつべきでないと説くゲードは、「国家の廃止と破壊」を大衆解放の必要条件として、^(注1)インターのマルクス派を攻撃する。モンペリエのインター支部をバクーニン派にかえようと試みて失敗し、ブルス (Paul Brousse) が除名された時、ゲードはモンペリエのインターの秘密幹事カラス (Callas) の名をあげて非難した。二ヵ月後フランス南西部でインターの多数の闘

士が逮捕されるや、総務委員会はこれをゲードの罪だと反駁する。^(注3)しかしこの逮捕が、マルクス主義移植のため総務委員会が派遣したダントレイグ (Dantreygue) の裏切りによることがわかった時、ゲードの怒りは爆発する。「いまや疑いと予想は明白な事実となった。ヘーグ大会で協会からバクレーニンとギョームを追い出すの力をかけた後、個人的権限で同志ブルスまで追放したスワーム (Swarm) は、真実の光の下にトゥールーズの裁判所で仮面をはがれた。彼はわが南部の労働者をインターに加盟させるという口実の下に、マルクスが全権を握っているおかげで、テイエリストの網の中に獲物として社会主義者を追いこんだ。……ダントレイグは検事局の助手なのだ。」^(注5)彼はこの機会をとらえてアナキズムの宣伝をすることも忘れない。「トゥールーズの裁判でわかったこと、それはマルクスの代弁者と総務委員会の破廉恥な役割のみでなく、マルクスと総務委員会が支持していた専制的組織制度の有罪判決でもある。……各国で労働者階級を無政府的に、かれらの利益に最もかなうように組織させよう。そうすればダントレイグのごときものははや不可能だ。」なせなら各地方の労働者は互によくしりあっており、一部の裏切りは一部の逮捕にしか至らないからである。^(注6)すでに両派の分裂は、七二年九月のヘーグ大会で決定的になっていた。

七三年になるとイタリア警察は、亡命中のインターナショナルとコミューンに参加した人々を追いはじめた。ゲードはジェノヴァに暫時とどまった後、失敗したアルゼンチンへの移住計画をのぞ^(注7)けば、ミラノに帰仏するまで定住する。この時代は彼にとって重要

な意味をもつことになった。生活面では、ナボレオンの旧部下の娘マチルド (Mathilde Constantin) と結婚し、長男をもうける。思想面では、フランス一八世紀哲学を読みなおし、デザミ (Desamy) を発見し、ブルジョア経済学をまなび、チエルヌイェフスキー (Nikolai G. Tchernyevsky) の *Que faire?* により唯物史観に接して無政府主義から脱却しはじめる。これよりさき、いかなる諸権利も保証も、財産と生産手段をもたず他人の道具となつていゝものにとつては意味がないこと、一つの国に「自分の労働と無関係に報酬をうける」ものと、「自分の労働とは無関係に罰せられる」ものがあることを指摘していたゲードは、鋭い洞察力と論理的思考によって、七五年に *Essai de Catechisme Socialiste* をかく。彼はここで人間、階級、社会を動かす要因は、利益であり利害関係であるという概念に到達した。^(注9)コンパールモレルは、ゲードがマルクスの何らの作品をも読まずにここまでできたことに敬意を表している。^(注10)一八七六年、当時イタリアで有名な経済学者ラムベルティコ (Lampertico) があらわした *L'Economie des peuples et des Etats* に対し、ゲードは *De la propriété* で次のように反論する。人間社会が所有者、非所有者にわかれる時、前者は指導階級となり「国家」という名の下に、公共的といわれる——本当は抑圧的な、あるいはかれらの特権擁護的な——サーヴィス、すなわち警察、知事、聖職者、軍隊というものを組織し維持する^(注11)ことになる。そして昔と今の労働者の状態の比較研究から明らかになることは、「富者がより一層富み、貧乏人がより一層貧乏になる傾向がある」ということ

である。「生産者の貧困は生産にともなつて、生産という直接的理由で増大しつづける。……土地生産物については、人口とともに、その必然的結果としての需要の増加とともに、地代という名目で所有者に収奪される部分が增大する。他方、機械の応用、完全化、普及化にともなつて、生産における資本の役割、したがつて生産物に対して資本家が要求するわけまえが、日に日に著しくなつてくる。」^(注12)以下ゲードは、ラムベルティコが、もたざるものは公共財産の恩恵をうけているとのべたことについて逐一反論し、「もたざるものの負担で、もてるもののためにつくられた公共財産は、富の分配の不正を正すどころか、不正をいよいよ深めひろげてゆく」と結論する。しかし彼が裁判官、軍人、僧侶などの生産しうる、また生産しなければならぬ富を評価してかれらを非生産的と非難する時、^(注14)まだそこに国家機構の無用を説くアナキスト的思想の残滓がうかがえるのである。なお経済理論については、資本主義的生産の諸関係が分析されておらず、資本主義体制固有の矛盾が示されていないと批判されるが、彼の理論はむしろ需給関係から社会的矛盾をついた、後のフェビアン社会主義の資本主義批判と同じ系列に属するといえるのではなからうか。私有財産制の不正と、資本主義制度下の社会化の欺瞞をあげくこの論文は、明らかにこの後の彼の進む方向を示唆するものであった。

nings. p. 103.

(注3) 総務委員会は、ゲードがカラスの名をあげたため警察のしるところとなつて一斉に逮捕されたというが、ここに二つの見解がある。Zevaès はゲードが Callas を Colas と誤つてかいたため、警察ではわかるはずはなく、ダントレイグの密告によるといふ。Belaine は総務委員会の説をとる。Willard はどちらが決定的ともいえないがダントレイグがスパイだったことはまちがいないといつてゐる。Willard; Choisis p. 14.

(注4) Dentreygue の偽名。

(注5・注6) Les Proconsuls marxistes (Le Bulletin de la Fédération jurassienne 1873. 4. 5. に発表) Zevaès; De l'Introduction pp. 61-62.

(注7) 一八七四年九月 Arthur Arnould とノホンスブイレンに移住するためアントワープまで行くが、旅費が不足し Arnould のみ発つ。

(注8) L'Egalité de Marseille 1872. 11. 24 "La République conservatrice" Willard; Choisis. pp. 55-56.

(注9) Willard; Choisis. p. 16. Morel; Guesde. p. 84.

(注10) Morel; Guesde; p. 84.

(注11) Willard; Choisis. p. 57.

(注12) Ibid., 58.

(注13) Ibid., 60.

(注14) Ibid., 57.

(注15) Ibid., 16.

(注1) Almanach du peuple 1873. Bernstein; the Beginnings. p. 103.

(注2) La Solidarité révolutionnaire 1873. I. 1. Bernstein; the Begin-

一八七六年九月、ゲードは出版罪が時効になったので、一度スイスにいった後フランスに帰る。彼のマルクシズム宣伝家としての、熱心なプロレタリア組織者としての生活が、これからはじまる。しかしその前に、彼の亡命中のフランス国内の状態を一瞥する必要がある。コンミュン失敗後の労働運動は、指導者の喪失と、秩序を口実の反動政策により全く沈滞した。一八七二年のインター弾圧法はその一つのあらわれである。ストライキや私有財産制の廃止などの煽動を目的とする一切の結社が禁止され、これにより単なる労働組合もしくは弾圧された。それにもかかわらず、産業が回復し労働力が求められはじめると、労働運動は再び芽生えた。一八七二年頃から穏健な組合主義運動が、急進的共和主義者のバルブレ (Barberet) を中心にはじめられ、短命ではあったが La Cercle de l'Union syndical が結成された。賃金値上げは製品価値の騰貴をもたらすという理由で、ストライキに反対するバルブレらの協同組合思想が、コンミュン以後の労働運動を支配した。内気、従順、資本主義への服従、そうしたものが抑圧を生きのびる組合の第一の特徴であった。^(注1)一八七三年のウイン、七六年のフィラデルフィアにおける万国博覧会に出席した労働代表も、労働組合の必要性は痛感したもの、消費、生産協同組合思想をこえるものではなかった。協同組合思想こそ当時まだフランス国内に残っていた、工場制におされる家内工業労働者たちの思想の反映であった。こうした空気の中にあつては、七二年から七五年にかけて分冊形式で伝訳された「資本論」が、大きな影響をもつはずはなかった。六月の叛乱の直前に出た「共

(注5)

ゲードがカフェ・スフレ (Cafe Soufflet) での若いインテリたちとの交友で、マルクシズムに接するのはこの頃のことである。マルクスに「資本論」要約の許可を頼んだドヴィル (Gabriel Deville) や、ドイツ社会主義文学にくわしく、マルクスの個人的信用をえてリーブクネヒト入獄中「Die Volkstaat」に関係し、ビスマルクに迫られたジャーナリストのヒルシュ (Karl Hirsch) がこの中にいた。ゲードは特に後者からマルクシズムと、社会民主主義の戦術を教えられた。^(注6)一八七六年から翌年にかけてリヨン絹工業が重大危機に達したさい、ブルジョア経済学者がその原因を、原材料の騰貴、国外市場の縮小、流行の変化、地方工業の発達に求めたことに対し、彼は La Crise Lyonnaise et l'Ordre social をかく。「質量ともに生産は、経済学者が需要供給法則とよぶものによって決定され支配される」ゆえに、毛織物や交織物が絹布にかわって使用されはじめれば、絹製造業が不振になるのは当然である。しかし、もし各人が自身でつくり出したものしか処分しないような社会になれば、資本は先ず全社会にとって最も直接的な、最も本質的な要求を満足させるような生産に使用され、これが満たされて後次第に必要度の少ないものへと使用されるようになる。^(注7)彼は需要供給法則それ自体を、資本主義体制においては危機を生み出し、社会主義体制においては調節の役割を果たすものとして考えていた。ここでも流通面のみがとり上げられ、生産関係が無視されている。しかし、生産の真の価値と生産物と、生産の報酬と賃金との差が、資本家によって盗まれると、

マルクシズムのフランス流入に関する一考察

産党宣言」も、その頃は書誌的に珍しいものとしてしか扱われていなかった。^(注2)僅かに「資本論」が知られていたのは、皮肉にもブルジョア経済学者がそれを攻撃したことによってであった。労働価値説を否定したブレンターノ (Eugen Brentano) や、「資本論」を読んで夢魔の呪文にかかったようだと述べたラウレエ (Emile Laveleye) の論争の正当性が何であれ、無意識にかれらはフランスにマルクス理論を移入していた。またマロン (Benoit Malon) は L'International, son histoire et ses principes (1872) で、ラッサール、モーネルらとともに、インター推進者としてマルクスを紹介し、Exposé des écoles socialistes françaises (1872) の中で、マルクシズムの短く不完全な説明をしていた。マルクスやマルクシズムについての本がどれだけ読まれていたかは知るよしもないが、「その出現は社会主義を論じ、カルチエラタンのカフェに集まる学生グループに、いくらかの影響をあたえた」ことはまちがいない。

ゲードが帰国したのは、こうした状態の中に労働新聞「Tribune」の提唱で、全国労働者会議が開催される直前であった。一〇月二日から一〇日にかけてのこの会議の決議は、第一に結社、集会の制限法の撤廃、第二に労働階級よりの議員の選出、第三に女子労働の保護を要求するもので、本質的に協調主義であった。この穏健さをロンドンのブランキストたちは攻撃したが、ゲードは敵も味方もこの大会の重要性を認めるだろうと暖い目をもって眺め、特に会議が労働者および労働者代表以外のものを含まなかった点で、あらゆる政治家にとって教訓的かつ恐迫的な第一級の出来事であったと喜んで

(注8)

一応剰余価値の概念を彼がとらえていたことは注目してよい。一八七七年「人権」が消滅するや、同年一月「L'Egalite」(以下「平等」とする) が創刊された。第一号に掲げられたその目的は、単に政治的領域における共和主義や唯物哲学での無信仰ではなく、先ず社会主義であることであつた。望むところは法律上の架空的、かつ形而上学的平等ではなくして、事実上の確固たる平等である。^(注9)一階級のみが長子相続する権利を拒否し、人類にかえされた全世襲財産の平等な享有、すなわち土地および生産手段の集産主義的所有が主張された。そしてこの集産主義社会をかちとるために、権利行使の力をもつ政党の結成をうながしている。^(注10)続いて、集産主義的社会主義は決して個人的自由と矛盾するものではなく、各人すべてに最大の福祉を確保するための必須条件であることをのべた Le Collectivisme et la Liberte や、La loi des salaires et ses consequences などがつぎつぎに発表される。後者の中で示された彼の賃金についての考えは概ね次のようであつた。資本家は生きている労働者なくしては生産が行えず利潤も引出しえない。ゆえに労働者を生存させるため、賃金は「労働者の生命維持と、その再生産に不可欠な生活資料の最低限より下げることができない」。しかし必要以上に挽馬に秣や麦をやり、不必要なほど汽車の釜に石炭を投じるものがないのと同様、労働者に最低限度以上に賃金を支払うものもない。労働者は、少数の資本家に役立つ範囲でしか生きられず、生きることを許されない。^(注11)ゲードの結論はすでにマルクスによつて、一八七五年に批判されたラッサールの賃金鉄則そのものであつ

た。

一八七八年、彼は「平等」に再び階級国家観を表明するもの^(注12)、まだ完全にアナキズムとのきずなをたぢれない。それは普通選挙の解釈にあらわれた。彼は普通選挙を重視することは、労働者を分裂させ、平和的、漸進的解放のまちがった希望をもたせ、力がりみ出したもの——力の表明以外のなものでもない現在の状態——に合法性をあたえることで、労働者を誤りに導くと反対する^(注13)。ゲードを含めて「平等」編集者たちのマルクンズムについての知識の混乱は、ドヴィルが「社会主義を讀者に教える一方、われわれはそれを学びつつあった^(注14)」と後にかいてのをみればうなずけよう。

一八七八年一月、リヨンで第二回全国労働者会議が開かれたが、この大会も前回同様協同主義的性格に終った。同年九月、すでに七月に当局から禁止されていた *Le Congrès ouvrier international* を開くことを公表したゲードは、ドヴィルらとともに逮捕され、六カ月の刑と三万フランの罰金をいわたされた。しかし仲間三九人と第一〇軽罪裁判所に出頭した彼が、資本主義とブルジョア共和国に対する告訴状としての集産主義弁護演説をしたことは、かえって集産主義の宣伝となった。「市民の平等、それは支配階級だけのものだ。傭主が白昼おこなう集会をなぜ労働者がしてはならないのか。資本家が万国博覧会でした国際会議を、なぜプロレタリアートが開いてはならないのか。」彼は法の前の平等も、生活手段の平等もなくしては有名無実であることを鋭くつき、「これを解決するには集産主義以外にはない」と訴えた^(注15)。サント・ペラジー刑務所で暇を

えた彼は、獄中の仲間と *Programme et Adresse des Socialistes révolutionnaires français* をしたためる。これは労働党——その時はまだ存在していないが——の最初のプログラムといえよう。

「前文。」

(一) 人類の名において、あらゆる人は生れてから働けるようになるまで、必要をみたし才能を伸ばすことを請求できる権利を有し、

(二) 社会の各成員が、可能なあらゆるものをつくり出しうる知的、肉体的能力を最高に發揮できるようにすることが、社会にとって重大且つ主要な利益であるゆえに、

次のことを要求する。

(一) 差別なくあらゆる児童に、養育費、教育費および総合的職業指導が社会負担であたえられること。

(二) 土地とその他の生産手段、すなわち動産、不動産をとわぬ全資本が、社会によってとり戻され、生産者グループの自由にまかされるように、社会または国家の所有にしてかつ譲渡不能の財産にされること^(注16)である。

この他出版、集会、結社の自由なども要求されているが、要するに、根本は集産主義によって労働者を、道具から人間としての地位に引上げること、すなわち、生れと剣による古い封建性をそのまま引きついだ土地と商工業の封建性を、革命により打倒すること^(注17)であった。このプログラムはパリや地方の社会主義者におくられ、七九年四月に四頁のパンフレットとして発表された時には、五四一

名の署名者をうるほどの反響をよんでいた。彼の刑務所でのもう一つの著作 *La Collectivisme par la Revolution* は、先の賃金法則に関する論文の続編をなすものである。集産主義——動産、不動産の社会化または国有化——を実施するにあたって、彼は買収や賠償金をともなう取用を排する。社会化を実現する革命、それは彼にとって投票によるか小銃によるかはたいした問題ではない。「古い法律」が「まじめに「新しい法律」によっておきかえられれば革命であった。そして革命には、プロレタリアートの「資本への権利」の意識と、プロレタリア勢力の組織とが必要^(注18)なことが主張される。しかし革命で利益をうる人と、全力をあげてこれに反対する人との比率は一〇対一であり、この較差が日ましに大きくなる^(注19)ということから、ただちにこの革命が可能であり容易であると結論する^(注19)ところに、社会、経済の発展を自働的なものとみる彼の機械的な観念がうかがえるのである。

病氣となつて入ったネッカーの病院で刑を終えたゲードは、今度は新たな武器、弁説をもつて登場する。共和国のブルジョアや、共和派政党の実体をあばく彼の雄弁は、少しずつ成果をあげていった。パリ、マルセイユ、ニーム、ポルドーなどで、最初の革命的社会主義グループが結成された。他方アンザンの炭坑夫ストなどの後をうけて、労働階級の闘争性も強まり、客観情勢は労働運動に有利に転回しつつあった。一八七九年一〇月、マルセイユで第三回全国労働者会議が開かれたが、ゲードは病氣のため出席できず、ロンバール (Jean Lombard) や「平等」代表のフルニエ (Eugène Four-

nière) と手紙で連絡していた。会議では異論はあったが、結局プロレタリアートの状態の改善は、賃金制度の廃止以外にはないことが明らかにされ、その賃金制度の廃止を目的として、資本を集産的、非個人的、不可譲的にすることが決議された。そして労働党結成のため、年一回全国会議を開くところの六地区よりなる *Fédération du Parti des Travailleurs Socialistes en France* がくられた。集産主義的決議を採択し、イギリス、ドイツ、オーストリア、スイスなどの各社会主義団体から多くの激励をうけたこの会議は、ブルジョア急進主義との関係をたつと同時に、インダー自身がなしえなかつた万国のプロレタリアートの団結をなすとげた^(注20)と、ゲードは称賛している。労働運動が集産主義的傾向をおびるにつれ、政府も教会も警戒をはじめた。ゲードは反対派と闘う一方、労働者をブルジョア政党のために利用せんとするクレマンソー (Georges Clemenceau) らの急進共和主義者たちとも闘わねばならなかつた。闘うのに必要な革命的政党の組織に、最も重要なのは「プログラム」をあたえることだと考えた彼は、八〇年五月ロンドンに渡り、マルクス、エンゲルス、ラファルグ (Paul Lafargue) らの助力の下にプログラムを作成する。マルクスは前文を自身でかき、ゲードが最低限プログラムをかき、

「前文。生産階級の解放は、性や人種の差別なき全人類の解放である。生産者は生産手段(土地、工場、船舶、銀行など)を所有した時のみ自由でありうる。生産者に生産手段を帰属せしめるには二つの形態しかありえない。(一) 普遍的事実としてはかつて存在

したことなく、産業の進歩によって次第になくなる個別的形態と、(二)資本主義社会の発展によって、その物質的、精神的要因が

つくり出されてきた集産的形態とである。
前文。この集産的形態は、別個の政党として組織された生産者階級——プロレタリア——の革命的活動からのみ生れ出る。このような組織は、これまでの欺瞞の道具から解放の道具となった普通選挙を含む、あらゆる方法によって追求されなければならない。フランスの社会主義的労働者は、資本家階級からの政治的、経済的収奪と、全生産手段の共有への復帰に努力することを目標としながら、組織と闘争の手段として次の即時的諸要求をもって選挙に臨むことを決定した。^(注21)

すなわち政治綱領としては、一、出版、集会、結社(国内的、国際的)の自由。婦人の地位の向上。二、宗教予算の廃止。宗教財産の没収。三、公債の廃止。四、常備軍廃止。人民の武装。五、自治体の行政権、警察権の掌握。経済綱領としては、一、週休制。八時間労働制。十四歳未満の児童の就労禁止。十八歳未満の少年の六時間労働制。二、労働団体による徒弟の保護。三、労働統計委員会により、各地の生活必需品価格に応じて毎年決定される法定最低賃金制。四、低賃金外国労働者の雇傭禁止。五、両性の同一労働同一賃金制。六、社会負担による児童教育。七、老人、労働傷害者への社会保障。八、労働者の共済基金、積立準備金に対する使用者の干渉禁止。九、事故に対する使用者の物的責任、および従業員数、危険性に応じた使用者の保証金払込による保障。

一〇、各工場の特別規定への労働者の参与。使用者による罰金制の禁止。一一、公共財産譲渡契約の廃棄。就労労働者に委ねられた全国有工場の収用。一二、全間接税の廃止。全直接税を、三千フランをこす収入の累進課税へ変更。傍系相続、二万フランをこえる直系相続の廃止。^(注22)

マルクスは、ゲードのいくつかの誤りにもかかわらず、この短い文章には労働運動自体から出てきた諸要求が含まれており、フランス労働者の目覚めに大きく貢献したといっている。^(注22)
いよいよ「プログラム」採択のための闘いがはじまった。マルクスが、フランスで最初の最も広い意味での労働者新聞と呼んだ「平等」は、革命的労働者の結集をはかり、マルクンズムの普及につとめる。ゲードは新聞のほかに、講演と会合をフランス中にとりこめておこなった。ブルジョアたちはプログラムを「内乱の雷管」とか「革命の偽善的武器」と非難するが、それにもかかわらずこれは全国会議をひかえたパリの地方会議で承認されたのである。^(注23)

一八八〇年十一月第四回全国労働者会議がル・アーブルで開催されたが、プログラムをこの大会で全社会主義政党のものにしよとする集産主義者と、協同組合主義者、改良主義者、急進的共和主義者たちとの間の不和は、早くも第一日にして決定的となった。多数の小研究団体をつくり、その代表をもって会議を有利に導こうとする前者と、二五名以上の団体の代表しか認めようとする後者との争いは、ついに分裂にまで発展した。ここに両派はそれぞれ別の会

議を開くことになる。ほとんどがパリの研究団体代表よりなる集産主義の会議は、^(注24)プログラムを四三対一〇、棄権六で承認し、ついで「現在は自由な共産主義への過渡期と考えられるゆえ、できるだけ早く、あらゆる可能な手段で土地、地下資源、労働要員を集産主義的に収用する必要がある」ことを宣言した。^(注25)さらに協同組合は労働者の状態の改善に何ら役立たず、工業の発展は小商店や中産階級を没落させ、資本の集中、低賃金、貧困の増大を生み出すと説明した後、奴隷状態をつくり出している賃金制度を廃止するため、ブルジョア政党とは全く異なる労働者の政党を結成する決議を採択した。ゲードを中心とする「労働党」(Le Parti ouvrier)は、この議を生じたのである。

- (注1) Paul Louis: Histoire du Socialisme en France (1937) p. 251.
- (注2) Zévaes: De l'Introduction. p. 37.
- (注3) Bernstein: the Beginnings. pp. 110-111.
- (注4) Ibid. p. 112.
- (注5) Les Droits de l'homme. 1876. 10. 15. Willard; Choisis. p. 62.
- (注6) Herg. v. Carl Grünberg: Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung (1929) George Bourgin: "Jules Guesde" p. 93.

- (注7) Le Radical 1877. Feb.-Mar. Willard; Choisis. pp. 67-68. 一頁は Le Radical 1877年11月16日から17日まで協力。
- (注8) Le Radical 1877. Feb.-Mar. Willard; Choisis. p. 69.

マルクンズムのフランス流入に関する一考察

- (注9) L'Egalité 1877. 11. 18. Georges Weil: Histoire du Mouvement social en France 1852-1924 (1924) p. 220 から引用。

- (注10) L'Egalité 1877. 11. 18. Zévaes: De l'Introduction. pp. 78-79. から引用。

- (注11) Willard; Choisis. pp. 70-71.

- (注12) L'Egalité 1878. 12. 16. Bernstein; the Beginnings. p. 120 から引用。

- (注13) L'Egalité 1878. 7. 14. Bernstein; the Beginnings. pp. 120-121. から引用。

- (注14) G. Deville: Le Capital de Karl Marx (1897) pp. 7-8. Bernstein; the Beginnings. p. 115. から引用。

- (注15) Willard; Choisis. pp. 78-85.

- (注16) L'Egalité 1880. 1. 21. Willard; Choisis. pp. 94-95. 第一回の L'Egalité は一八七八年に三三冊で消滅した。これは第二回の L'Egalité の第一号である。

- (注17) Willard Choisis. p. 97.

- (注18) Ibid. pp. 99-100.

- (注19) Ibid. pp. 100-101.

- (注20) Revue Socialiste 1880. 1. 20. Willard; Choisis. p. 104

- (注21) Willard; Choisis. pp. 117-119.

- (注22) 注23) 一八八〇年十一月五日づけのマルクスよりソルゲ宛の書簡。Willard; Choisis. pp. 29-30

- (注24) Paul Mink 1877年11月10日の労働組合代表よりなるという。Bernstein; the Beginnings. p. 184.

(注25) Morel; Guesde. p. 188.

(四)

以上ゲードの思想的展開過程をたどれば、コンミュン以前の急進的共和主義の時期、スイス、イタリアでのバクーニンの無政府主義を奉じた時期、帰仏後のマルクシズムに傾倒した時期という図式をえがくことが一応可能である。マルクス主義者としてのゲードのあらゆる活動は、彼がマルクスへあてた現在ただ一つ残っている手紙にあるように、「独立した戦闘的労働党をつくることであり、この党が独立的かつ戦闘的であるためには、それを構成するフランスのプロレタリアートに、ブルジョア急進主義の欺瞞をはぎとって見せ、解放は闘争からのみ生れ得ることを納得させる」ことであつた。^(注1)そして集産主義思想の普及と、労働階級自身の政党の結成に対する彼の功績は、高く評価できるし、彼のそれに対する情熱もまた称讃に値しよう。しかし彼がどれだけ十分にマルクシズムを理解していたかということになると、なお相当の問題がある。彼はマロンにより一八七二年、無政府主義者とみなされたことに反駁して、自分は常に反バクーニン主義者だ^(注2)とさえい^(注2)うが、スイス、イタリア亡命当時彼がバクーニストであつたことはまちがいない。それゆえ彼がマルクシストになつたのは、一八七七年「資本論」を読んだ後ということになる。彼は同年、革命のために労働者は選挙を含めてあらゆる手段に訴えねばならないとい^(注1)い、八〇年には、地理的、気候的環境により植物の成長が決定されるように、社会的環境によって闘

争手段も決定されるとして、「フランスのような国ではダイナマイトの使用は不必要だとい^(注3)っている。しかるに七八年に彼は普通選挙に反対し、ル・アーブル大会でのプログラム採択に先立つ声明文においてすら、「来るべき都市、立法府選挙で投票の真価をとい、もし何らの結果をもえられないならば、純粹に革命的活動のみをおこなう^(注4)」とアナキスト的な言葉をもらしている。こうしたことについてフルニエーは、「われわれは当時（マルセイユ会議当時—筆者）アナキストたち、と純粹に思想的というよりはむしろ言葉の上で僅かに異なつて^(注5)いた」と後でのべている。したがってこうした矛盾が、彼の時々に応じた戦術的なものなのか、彼の思想の混乱なのかは直ちに決しがたい。ただゲードが貸金鉄則をとつていたことは事実であり、マルクスの反対にもかかわらず、最低貸金法をプログラムの中で要求したことも確かである。彼は剰余価値の概念を把握はしていたが、弁証法の觀念に欠けていた。そして先にものべたように経済現象の分析にさいして、生産関係からの接近を等閑にふしている。ゆえに、ゲードがジャーナリストであつたため、表現に誇張や不足があつたことを考慮はしても、「マルクスその人よりも一段とマルクス主義的であつた^(注6)」ということにはためらわざるをえない。マルクス主義者ゲードの中にひそむ、急進的共和主義者時代の愛国的、反プロシヤ的感情、マルクシズムにおける政治闘争観の理解不足は、後の彼の行動——一八九〇年代の議会主義化、第一次大戦時の拳闘一致内閣への入閣——にもつながるものといえよう。こうしたゲードのマルクシズムの理解の程度は、そのまま、工業化に

おくれ手工業労働者のまだ多数残存していたフランスへの、マルクシズム浸透の度合をも示すものであつた。

(注1) 一八七九年四月または五月にかかれたもの。Willard; Choisis. p. 103.

(注2) Histoire du socialisme にかかれたことに対し、フロンで修正を要求する抗議文をおへる。Morel; Guesde. pp. 147-148.

(注3) L'Égalité 1880. 8. 11. Bernstein; the Beginnings. p. 174

(注4) Bernstein; the Beginnings. p. 165.

(注5) Ibid. p. 185.

(注6) J. P. Mayer; Political thought in France, from the Revolution to the Fourth Republic (1949) p. 98. 五十嵐豊作訳「フランスの政治思想」(一九五六)一〇一頁。